

第295回 令和8年9月24日（木）

「仕事を始める」

みなさん、数年後には社会人として働くことになります。そのときには様々な悩みが生まれることでしょう。社会に出るといことはどの世界も楽ではありません。

今はどこの会社も1年目にOJT（オンザ・ジョブ・トレーニング）で上司が働きながら仕事を教えてくれます。右も左もわからない状況ですからこれは大きな助けになります。職場によってはしっかりと研修期間を取る場合もあるかもしれません。

私の生きてきた教員の世界は大学時代に教育実習を経験すると、次はいや応なしに先生として教室で一人きりの授業をすることになります。昔は初任者に対する制度も今ほど整っていなかったので、4月の最初の授業は相当大変でした。

私の採用は団塊の世代の大量採用の後でしたから、常に最若手、同期があまりいない状況でした。我が道を行く先輩が多かった時代なので、言われることも一人ひとり違います。自分で考えながらロールモデルを探して、自分のスタイルを確立していきました。

感銘を受けて真似をしようと思った先輩もいれば、反面教師でこうなりたくないと思った先輩もいます。生意気な若手だったと思いますが、ほとんどの方は色々なことを丁寧に教えてくださいました。受け入れるかどうかは別にして、先輩からのアドバイスは基本的にしっかり聞くようにはしていたつもりです。

とにかく最初のころは大変で、自宅に帰るとお風呂も夕飯もなしで倒れるように寝ていました。朝起きてシャワーを浴びて目を覚まして出勤するとほぼ毎日のようにトラブルが起きていて、あっという間に日が暮れているという感じでした。当時は子どもが多く、1クラス50人近い生徒がおり、全部で12クラスもありました。

やっと落ち着いて周囲が見えるようになったのは3年目くらいだったと思います。自分のスタイルが少しずつでき始め、バスケットをやりたいという元々の動機を実現させるために近隣の中学校に呼びかけました。本当にありがたかったのは何の実績もない私の高校に多くの部員を紹介してくれた中学校の先生がたくさんいらしかったということです。

勉強が苦手でバスケットをあきらめざるを得ない生徒たちが「ここでバスケットをやる」と決めてきてくれるようになりました。苦労話はここで書ききれないくらいありますが、自分なりに全力を尽くして、最初の学校には9年間在籍しました。その記憶が今の自分の原点になっています。